

ユートピアンなスキルとは

現在一橋大学の学部英語エリアからは、読解、ライティング、ディスカッションなどでアカデミックな技術を身につける科目、さらには言語学、英語圏の文学研究、カルチュラル・スタディーズ、エリア・スタディーズ（地域研究）などを横断的に関連づけながら学習することができる魅力的な英語科目が提供されています。

これらはいわゆるコミュニケーションに重点を置いた「スキル」授業でもなく、そして旧来の「教養」科目でもありません。旧来の教養というパラダイムはビルドゥング (bildung)、つまりは国民国家が限られたブルジョア層の男性学生を美的な判断ができる主体として開発し、訓育することで、余暇がないためにそうした想像力と知性との遊戯ができない労働者階級よりも優位な存在として措定することに貢献して来ました。もちろん現代の国家はこうした旧来の教養教育には投資を行いませんが、しかし「グローバル」な「ブルジョア」層は実利的な知識だけでなく「教養」を持たねばならない、という今も根強い固定概念は基本的にはこうした階級意識に基づくものでしょう。また多文化主義がこうした教養の一部と化した現代においては、人種やジェンダーにおけるマイノリティ集団の芸術作品や文化生産物を知っていることがグローバルな教養とみなされますが、それもクリティカルに学ばない場合には、これら集団の歴史と経験を普遍ならざる特殊なものとして消費することに帰するでしょう。

大学が資本に従属してしまい自律した知の探求ができなくなる事態を、カナダの文学理論研究者のビル・レディングスは「廃墟の中の大学」と名付けました。そしてレディングは「廃墟」以前の「教養」の大学に戻りたいというノスタルジーを抱くことが、上記のような「国民」や「階級」の排他性を看過することにつながると強く警戒していました。

前置きが長くなりましたが、いわゆる「コミュニケーション能力」と「教養」がわたしたちを評価し、数値化してグローバル経済に登録したり排除することから、ある程度の距離をとって世界と触れ合う方法があるのではないのでしょうか。わたしたちが他者の言葉を理解し、他者に言葉を発する能力が新自由主義の中での他律的な道具とされてしま

い、わたしたちが資本や企業が欲する言葉を先回りして使うことでそれらに従属してしまう。そうした状況からの自由を模索するために言語を使うことです。

言語をまなぶ、まねる、ということは国民・民族の排他性や資本の暴力性から自由になるために想像力の幅を広げることには貢献する模倣スキルの習得とすることができるでしょう。スキル、つまり技術（テクネー）とは既存の認識地図に沿って物を制作する方法として固定されると、この認識地図を下支える「野蛮」な思考法の奴隷となってしまうでしょう。戦争による人間の支配や、資本による人間を含む自然の破壊、こういった目的に資する技術のあり方にわれわれの多くは疑問の目を向けているはずです。

しかしスキルは支配的な思考法を解きほぐしながら、人間や非人間や自然の特異性を感じ思考するために用いることも可能でしょう。そうしたスキルを実験する場として「外国語」習得があるならば、「外国語」を学んでしまい「外国語話者」となってしまった私は、その立場から元来の「母語」なるものを感じ取るわけですから、そのとき「母語」なるものはそれ自体、不思議な違和感やざわめきを暫定的に寄せ集めただけの「外国語」として感じられるかも知れません。

しかし英語は現在の社会においてグローバルな支配的言語の側面を持つがゆえに、英語学習は支配的なスキル習得の一端を担ってしまうことは今の世界では避けられません。英語を外国語として学ぶということは、その居心地の悪さをも含めて感じ取るということだと思います。居心地の悪さには、否定的な私たちでよりよい言語社会へのユートピアンな希求が含まれます。英語以外も勉強したい、世界と平等に触れ合いたい、人間以外の言葉も学びたい。そんな希求も含めて英語の世界に飛び込んでいただければ良いのではないのでしょうか。